The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『エルサレム解放』第19 歌の狼の比喩に関する一考察
Author(s)	村瀬, 有司
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2012, 7, p. 35-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8638
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『エルサレム解放』第 19 歌の狼の比喩に関する一考察

村　瀬　有　司*
MURASE Yuji

Abstract:

The Analogy of the Wolf in the 19th Canto of Torquato Tasso's *Jerusalem Delivered*

In the 19th canto of *Jerusalem delivered*, Torquato Tasso compared Rinaldo, one of the heroes of the Crusades, to a wolf.

Even as the preying wolf in the darkened air circles the barred sheepfold, plotting his treacheries, his greedy maw grown gaunt and in his hungering spurred on by his natural wrath and hatred; so he searches all around whether any approach (be it easy or rugged) is seen to open up. (Jerusalem delivered: XIX, 35)

The knight who fights for the faith is compared to the greedy beast, a morally negative image. In this article, I try to examine what prompted the poet to use the simile of the beast in the context of his religious work. First, I try to draw a comparison between Tasso's simile and Virgil's Aeneis (the original expression used in the epic), explain some differences between the two phrases, and point out Tasso's preventive measures to introduce the simile. Second, I examine Rinaldo's role as a powerful fighter in the combat against pagans, researching comparisons of the knight to other beasts, a literary form Tasso did not employ for other Christian heroes. Third, based on the dreadful descriptions of the battlefield and the militant images of angels, I investigate the aggressiveness of the Crusades that the simile of the wolf suggests.

This research will show that Tasso had a valid reason to use this comparison.

Keywords : Torquato Tasso, Italian Renaissance literature, simile, poetics
キーワード：トルクァート・タッソ，イタリア・ルネサンス文学，比喩，詩論

＊　大阪大学世界言語研究センター・准教授

1. 問題の設定

トルクァート・タッソ（1544-95）の代表作『エルサレム解放』（全 20 歌）は，第一回十字軍による聖地の解放を歌った叙事詩だが，この作品の第 19 歌に，キリスト教の若き英雄リナルドが異教徒を攻撃する姿を描いた，次のような比喩がある[1]。

Qual lupo predatore a l'aer bruno
le chiuse mandre insidiando aggira,
secco l'avide fauci, e nel digiuno
da nativo odio stimulato e d'ira,
tale egli intorno spia s'adito alcuno
(piano od erto che siasi) aprir si mira;
獲物を狙う狼は闇のなか
囲いをした牧舎の周囲を待ち伏せしながらうろつき回る，
貪欲な口を干上がらせ，腹をすかして
生来の憎しみと怒りに駆り立てられて。
そのように彼は入り口が（平坦であれ険しかれ）
どこかに開いていないか探りを入れる。［*GL*: XIX, 35, vv. 1-6］[2]

この箇所は，異教徒が立てこもる神殿をリナルドが窺う場面であるが，聖地解放のために大活躍をするキリスト教徒の英雄が，貪欲な狼（lupo）に喩えられている。ちなみに，『エルサレム解放』で使用されている狼の比喩を数えてみると，上記の箇所以外に 4 箇所確認できる（括弧内の語句はいずれも訳者）。

アルガンテはライモンドだけを追跡し，彼にのみ剣と狂乱の怒りを向けて，貪欲な狼のように相手の内臓で空腹を満たそうとするかに見える。［*GL*: VII, 106, vv. 5-8］

囲いをした羊小屋から追い出され，逃げて身を隠した狼が時折，巨大な腹の底なしの貪欲を今や十分満たしたにもかかわらず，なおも血に飢えて舌を出し汚れた口から血の残りを舐めてとる，あたかもそのように，彼（＝ソリマーノ）は血腥い殺戮を終えて立ち去った，黒い飢えにいまだ満足を覚えずに。［*GL*: X, 2, vv. 1-8］

彼らのふりをして，見知らぬ人ごみに静かに紛れ込む，誰も彼女（＝クロリンダ）に

1　本稿の作成に当たって，査読を担当頂いた先生から懇切なご指摘を頂いた。この場を借りて謝意を表したい。
2　以下『エルサレム解放』については *GL* と略記し，ローマ数字で歌（canto）を，アラビア数字で連（stanza）を，また v.（複数行の場合は vv.）＋アラビア数字で行（verso）を明記する。なお原文と訳文を併記する際は行単位で訳文を記載するが，原文を併記しない場合は，読みやすさに配慮して訳文の行分けは行わない。ただし，原文の 8 行詩節の形式を踏まえて，連ごとに訳文の段落分けを行うこととする。『エルサレム征服』（*GC* と略記）についても同様である。

気づかない。

そして，狼が密かに罪を犯した後で，こっそり姿をくらまして，森のなかへと隠れるように，彼女は混乱に助けられ，暗い大気に身を匿われて，去って行った。［*GL*: XII, 50(v. 7)-51(v. 4)］

邪悪な策略を獰猛な手に託されたオルモンドはその間に，謀略を行なう仲間を従え，偽の衣装で十字軍に紛れ込む。まるで狼が真夜中，濃い霧に身を潜め，猟犬のような振りをして，疑念を抱かす尻尾を腹に押し隠しつつ，牧舎に忍び寄っては中に入れないか窺うかのよう。［*GL*: XX, 44, vv. 1-8］

上記の４つの喩えは，すべて異教の武将たちになされたものである。キリスト教の伝統において，狼は，貪欲と奸智の象徴であり，『エルサレム解放』という宗教的作品のなかで，獰猛なあるいは狡猾な戦いぶりを見せる異教徒に対してこの比喩が使われることについては（良し悪しは別にして）それほど違和感はない。問題は，この狼の比喩が十字軍の英雄に対して（ただ一箇所ではあるが）使われているという事実である。筆者はこの件を読んだ際，十字軍の英雄を否定的に描き出すようなニュアンスに強い驚きを覚えたものだが，『エルサレム解放』のどのエディションに当たってみてもこの問題に言及した注解は見当たらない。カレッティが編纂したモンダドーリ社刊行の普及版テキストを見ても，注釈が充実したマイエルの監修版を読んでも，個性的なコメントを付したキアッペッリのテキストにあたってみても，あるいは 2009 年に刊行されたトマージの注釈版をみても，問題の比喩に関する典拠の指摘はあるが，キリスト教の英雄に対して狼の比喩を用ることの妥当性については，言及がない。また論者の知る限りこの問題を取り上げた研究論文も存在しない。

本論は，何故タッソが，この狼の比喩を，『エルサレム解放』という宗教的叙事詩のなかで十字軍の英雄を記述するのに使用したのかという問題を検証していく。第 2 節では，狼の比喩の典拠である『アエネーイス』の本文との比較，並びに『エルサレム解放』と後年の改作『エルサレム征服』における該当箇所の比較を通して，タッソの修辞上の配慮を指摘する。第 3 節では，狼に譬えられたリナルドの作品内での位置づけを確認し，最終第 4 節ではこの比喩の背景となっている宗教的な文脈について検証する。これらの考察を通じて，タッソが狼の比喩を使用したのは，相応の理由があってのことだということが明らかになるはずである。

2. 詩句の異同について

今日普及している『エルサレム解放』のテキストは，タッソ自身の自筆原稿が確認されていないために，作者存命中にフェラーラで刊行された複数の印刷本を底本としている。しかし，これらの印刷本は，作者の承認を得ないまま印刷元が勝手に刷り上げたものであり，複数の写本の語句が混ぜ合わされているうえに，編集者がテキストの空白箇所を勝手

に埋めた形跡もしばしば見受けられる。一方で，写本については，タッソの直筆ではないものの，その関与が濃厚なテキストがいくつか確認されており，これらの写本を通じてタッソの創作過程を時系列上に整理することが可能である[3]。

これらの重要写本を確認してみると，19 歌の問題の箇所は非常に安定していることが分かる。タッソは自作の推敲作業のなかで，多くの詩行を書き改めているが，6 行にわたる狼の比喩については一か所の異同もない。創作の中間段階に位置する Fr 写本を見ても，最終段階の N 写本や Es3 写本を確かめてみても，上記の第 19 歌の狼の比喩は，一言一句異なることなく記載されている[4]。ただし，タッソが全面的な加筆修正のうえに後年刊行した『エルサレム征服』では，該当箇所の語句に微妙な変化が見受けられる。この点については，後ほど検証する。

もう一つ，問題の個所に対するタッソの姿勢を指摘しておきたい。タッソは『エルサレム解放』を完璧な英雄詩に仕上げるために，複数の知識人に自作への意見を求めている。特に 1575 年から 76 年にかけては，ローマの文人及び聖職者に草稿を送付して校閲を依頼している。このローマとのやり取りは『エルサレム解放』の形成に深く関わっており，詩人は彼らの指摘を受けて挿話の削除や語句の変更など様々なレベルの修正を行なっている。しかしながら，このやり取りを記したタッソの一連の書簡を読み返してみても，第 19 歌の比喩への言及は一つも見当たらない。校閲者の一人である聖職者シルヴィオ・アントニアーノが，作品内の官能的な挿話や魔法のエピソードに対して難色を示していたことは確認できるが，該当個所への言及はない。またタッソの創作活動を知悉していた親友シピオーネ・ゴンザーガが，詩句の選択や挿話の配置などについて詳細な意見を述べていることは認められるが，狼の比喩についてはまったく触れられていない。この比喩について記した資料が偶然のいたずらで散逸してしまった可能性も否定できないが，タッソがローマに送付した草稿をシピオーネ・ゴンザーガが転写した Fr 写本には，上述の通り，19 歌の狼の比喩がすでに今の形で記載されており，ローマの校閲者とやり取りを交わした後に筆写された N 写本と Es3 写本にも，同一の詩行がそのまま記載されている。

これらの事実から，タッソは該当箇所について特に疑念を感じていなかったこと，この箇所を変更する必要に迫られていなかったこと，校閲者たちもこの比喩に特段の意見を述べていなかったことが確認できる。

このようにタッソが狼の比喩に懸念を抱かなかった根拠として，まず，古典作品の先例が挙げられる。問題の比喩については，タッソが英雄詩創作の手本としたウェルギリウスの『アエネーイス』の次の 2 箇所が典拠として指摘されている[5]。

3　『エルサレム解放』の写本・印刷本の諸問題については，拙論［村瀬 2008］を参照されたい。

4　タッソの写本は初期・中期・後期の 3 つの段階に区分できる。フェラーラのアリオスト図書館所蔵の Fr 写本は，他の者が筆写した本文に，タッソその人が書き込みを加えているという点で重要である。このテキストは創作過程の中期に位置づけられる。また，ナポリ国立図書館所蔵の写本 N とモデナの旧エステ家図書館所蔵の写本 Es3 は，タッソの書き込みが余白に転写されているという点で重要である。互いによく似たこの 2 つの写本は，『エルサレム解放』の創作過程の最終段階に位置づけられる［村瀬 2008：175-180］。

5　『アエネーイス』からの引用は，ウェルギリウス『アエネーイス』，岡道男・高橋宏幸訳，京都大学学術出版会，2001 年を使用させて頂いた。該当箇所のラテン語原文はそれぞれ次の通り。《Sic

「この言葉が若者たちの勇気に狂気を加えた。そのあとは，まるで狼が暗い靄の中へ獲物を漁りに行くかのよう。胃袋が催す邪悪な渇望のため当てどもなく外へ出たが，残された仔らは喉を渇かせて待ち受けている。われわれは武器の中，敵の中をまぎれもない死地へ進み，都の真ん中へ向かう道を取る。」(『アエネーイス』，第 2 歌，355-60 行）

トゥルヌスは苛立って，右に左に馬を走らせて城壁を窺い，道なき場所に突破口を探す。それはあたかも，羊に満ちた畜舎に待ち伏せを仕掛ける狼のよう。囲いのそばで吠えながら，風や雨を忍び，真夜中まで留まる。仔羊らが母の守る安逸のうちに鳴き声を上げると，狼は心険しく，邪悪な怒りを抱いて，眼前にない獲物へ猛り狂う。身を苛んでつのる飢えは長い間に狂乱に変わり，喉は血に渇く。まさしくそのようにルトゥリ人の王は，城壁と陣営を見つめるうちに，怒りの火を燃やす。(『アエネーイス』，第 9 歌，57-66 行）

最初の引用を見てみよう。この一節は，祖国トロイアを救うために絶望的な戦いに繰り出した主人公アエネーアスが，合流した味方の若者の様子を自ら回想した言葉である。「この言葉が若者たちの勇気に狂気を加えた」という表現からうかがえるとおり，狼の比喩は，激情に駆られて戦いへと逸る若者の姿をとらえている。この引用箇所の「喉を渇かせて」（faucibus…siccis）という表現が，問題の比喩の「貪欲な口を干上がらせ」（secco l'avide fauci）という詩句の源泉であることが指摘されている。また比喩で表現されているのが，双方の作品ともに血気盛んな若者であるという点にも注意する必要があるだろう。

二つ目の引用は，『エルサレム解放』第 19 歌の比喩と細部が類似しているという点でいっそう重要である。ウェルギリウスの作品では，敵将のトゥルヌスが，アエネーアス不在の陣営を守るために城壁内に籠城した相手方を攻めあぐね，苛立ちながら侵入経路を探る様子が，飢えた狼の比喩によって描き出されている。タッソは『アエネーイス』の詩行を正確に記憶していたので，立てこもった敵を攻めあぐねるという状況の類似から，ただちにウェルギリウスの狼の比喩を思いついたはずである。

しかし両詩人の語句を比較すると，重要な差異を確認することができる。ウェルギリウスの後者の原文には，『エルサレム解放』第 19 歌の比喩には使われていない表現がいくつか見受けられる。特に興味深いのは，キリスト教の伝統において重要な意味を持つ，「仔羊たち」（agni）という単語の有無である。イエスその人を示す「神の子羊」（Agnus Dei）と

---

animis iuvenum furor additus. Inde, lupi ceu / raptores atra in nebula, quos improba ventris / exegit caecos rabies catulique relicti / faucibus exspectant siccis, per tela, per hostis / vadimus haud dubiam in mortem mediaeque tenemus / urbis iter;》[*Aeneis*: II, 355-360]; 《Huc turbidus atque huc / lustrat equo muros aditumque per avia quaerit. / Ac veluti pleno lupus insidiatus ovili / cum fremit ad caulas ventos perpessus et imbris / nocte super media: tuti sub matribus agni / balatum exercent, ille asper et improbus ira / saevit in absentis, collecta fatigat edendi / ex longo rabies et siccae sanguine fauces: / haud aliter Rutulo muros et castra tuenti / ignescunt irae;》［*Aeneis*: IX, 57-66］

いう言葉や「迷える子羊たち」という人工に膾炙した表現からも分かるように，キリスト教における羊は，象徴的意義を担っている。『アエネーイス』の上記の詩行には，「母親のもとで守られた仔羊たち」（tuti sub matribus agni）という語句があるが，この母子の羊のイメージは『エルサレム解放』の問題の喩えには見当たらない。

ラテン語の「仔羊」（agnus）を受け継いだイタリア語の agno 並びに agnello という用語は『エルサレム解放』に 1 つずつ存在する。このうち agno の方は宗教的な意味とは直接関係しない用例であるが［*GL*: X, 51, v. 5］，agnello（agnel）についてはキリスト教の文脈に置かれていることが明白である。

ei te smarrito agnel fra le sue gregge
or riconduce e nel suo ovil accoglie
神は迷える仔羊のそなた（＝リナルド）を
いまや群れに連れ戻し牧舎へと迎える。［*GL*: XVIII, 7, vv. 3-4］

また後年の『エルサレム征服』を調べてみると，計 10 箇所で使われている agnello（agnel）は，すべて宗教的な含みを帯びた用法となっている[6]。例えば，「隠者ピエートロは，善良な羊飼いが弱った仔羊を心配するように（’l solitario Pietro, a cui ne cale/ come d’agnel che langue, al buon pastore/），彼のことを気にかけた」［*GC*: XV, 98］。このように宗教的な含みを帯びた羊という単語 agnello が問題の比喩においては使用されていないのである[7]。

また羊に関連して，ウェルギリウスが使っている ovili（註 4 の原文詩行の 3 行目）という名詞にも注意する必要がある。ラテン語の ovile 並びにこれを継承した同形のイタリア語はともに「羊小屋」を意味している。この単語も宗教的意味を帯びており，上記引用の「神は迷える子羊のそなたをいまや群れに連れ戻し牧舎（ovil）へと迎える」という詩行でもこの名詞が使われていた。また『エルサレム征服』では「聖なる羊舎」（santo ovile, sacro ovile）という表現が 2 箇所に確認できる［II, 55, v. 8; XXIII, 111, v. 8］。19 歌の問題の比喩において，タッソはこの ovile という名詞を使わずに，mandre という言葉を用いている。この名詞 mandra（この複数形が mandre）は，「家畜の群れ」並びに「家畜小屋」を意味する単語であり[8]，羊に限定された用語ではない。また『エルサレム解放』と『エルサレム征

6　該当箇所は，*GC*: II, 7, v. 3; XV, 98, v. 6; XX, 32, v. 3; XX, 33, v. 3, v.5; XX, 35, v. 8; XX, 62, v. 2; XX, 68, v. 5; XXI, 86, v. 3; XXIV, 123, v. 7. なお，agno については，『エルサレム征服』での使用は 1 か所のみ。これは『エルサレム解放』で使われた表現［*GL*：X, 51, v. 5］がそのまま引き継がれたものである［*GC*: XI, 69, v. 5］。

7　面白いことに，狼の比喩が使われた第 19 歌には，異教の武将ソリマーノが配下の兵士を避難させる姿を，牧人が家畜の群れを誘導する姿に譬えた比喩があるのだが［*GL*: XIX, 47-48］，ここで牧人が導く「群れ」も，agnello ではなく greggie 及び mandre という名詞によって表現されている。この greggie（gregge）という単語は，ひろく家畜あるいは野生動物の群れを指す言葉であり，「羊の群れ」または「信者たち」を意味することもあるが，同時に「（従属的な）群衆」を含意することもあり，必ずしも単語そのもに強い宗教的ニュアンスが込められているわけではない。

8　トマージは，問題の比喩で使用されている mandre という名詞を，「牧舎」ではなく「家畜の群れ」という意味に解している。そして該当箇所を「獲物を狙う狼が，囲いの中にこもった家畜の群れの周囲を歩き回るように」(come un lupo predatore si aggira attorno alle mandrie del bestiame chiuse nel loro recinto…)とパラフレーズしている。確かに，タッソがこの名詞を複数形 mandre で使う場

服』を読む限り，この単語が宗教的な文脈で使われるているケースはない。「聖なる」（santo, sacro）という形容詞に結び付けられることもない。

面白いことに，「羊小屋」（ovile）という名詞は，異教徒を狼に喩えた箇所では使用されている。本論の冒頭に挙げた，異教の武将ソリマーノが十字軍陣営から撤退する場面を，原文とともにもう一度紹介しておこう。

Come dal chiuso ovil cacciato viene
lupo talor che fugge e si nasconde,
che, se ben del gran ventre omai ripiene
ha l'ingorde voragini profonde,
avido pur di sangue anco fuor tiene
la lingua e 'l sugge da le labra immonde,
tale ei se 'n gia dopo il sanguigno strazio,
de la sua cupa fame anco non sazio.
囲いをした羊小屋から追い出され
逃げて身を隠した狼が時折，
巨大な腹の底なしの貪欲を
今や十分満たしたにもかかわらず，
なおも血に飢えて舌を出し
汚れた口から血の残りを舐めてとる，
あたかもそのように，彼は血腥い殺戮を終えて立ち去った，
どす黒い飢えにいまだ満足を覚えずに。［*GL*: X, 2, vv. 1-8. 下線訳者］

この比喩では，ovil という言葉から，狼が襲ったのは他の動物ではなく羊であったことが見て取れる。つまり，狼（＝異教徒）と羊（＝キリスト教徒）という関係を読み取ることができる。これに対して，問題の比喩では，「羊」に関連する表現が削除された結果，十字軍の英雄が同胞のキリスト教徒を襲っているかのごときイメージの混乱が回避されているといえる。確かに狼の比喩が使われているのだが，使い方については一定の配慮がなされているのである。

このようなタッソの配慮は，『エルサレム解放』から『エルサレム征服』への，該当箇所

合は「群れ」の意味が多い。また insidiando「待ち伏せしながら」という動詞の目的語になりうる点からみても，mandre を「群れ」ととる解釈は都合がいい。ただ，この単語を「家畜の群れ」ととってしまうと，「閉じこもった家畜の群れの周囲を歩き回る」という意味になってしまい，もとのウェルギリウスの比喩が担っていた，閉ざされた建物の周囲を探りまわるという，この場面の大事なニュアンスが損なわれてしまう。論者は，ここでタッソが使用している mandre は，「群れ」という意味だけではなく，「群れが閉じこもっている牧舎」という換喩的な意味合いを併せもっていると判断し，訳語にも「牧舎」という単語を入れて対処することとした（同様の mandre の使い方は『エルサレム解放』20 歌 44 連 5-8 行にもタッソの作品において確認できる）。なお，この単語が「群れ」であれ「牧舎」であれ本論の議論に大きな影響はない。この単語が宗教的文脈で使われることが少ないという事実は動かないからである。

の微妙な変化からも読み取ることができる。後者では，問題の狼の比喩は次のように改められている。

Qual lupo predatore a l'aer bruno
le chiuse mandre insidiando aggira,
che d'atro sangue ancor lungo digiuno
vorria far sazio, e l'odio il move e l'ira:
tal egli intorno spia se passo alcuno,
piano od erto che siasi, aprirsi mira;
獲物を狙う狼は闇のなか
囲いをした牧舎の周囲を待ち伏せしながらうろつき回る，
黒い血を飲めずにずっと抱えてきた飢えを
満たすべく，憎しみと怒りが彼を動かす。
そのように彼は通路が，平坦であれ険しかれ，
どこかに開いてないか探りを入れる。［*GC*: XXIII, 73, vv. 1-6. 下線訳者］

下線部が変更された箇所である。あまり重要ではない 5 行目を除いた残りの 2 行を見てみると，まず 3 行目が secco l'avide fauci, e nel digiuno「貪欲な口を干上がらせ，腹をすかして」から che d'atro sangue ancor lungo digiuno「黒い血を飲めずにずっと抱えてきた飢えを」に変わっている。元の詩行の secco, l'avide fauci, e nel という言葉が削除される代わりに che, d'atro sangue, anocr, lungo が新たに加わっているのだが，新たに加わった語句のうち，che は関係詞，ancor は「まだ」「なおも」という重要性の低い副詞に過ぎない。また lungo は「長い」という形容詞だが，ここでは digiuno「飢え」を強調する，どちらかと言えば抽象的な表現として使われており，もとの詩行の avido「貪欲な」のようなインパクトはない。

両詩行のアクセントの位置を下線で記すと[9]，

secco l'avide fauci, e nel digiuno　→　che d'atro sangue ancor lungo digiuno

となるので，前述の lungo 及び共通語句の digiuno を除けば，前半部の l'avide fauci が d'atro sangue に変わった点がもっとも重要な変化ということになる。つまり，この行の前半が「（狼＝リナルドの）貪欲な口」から「（犠牲となる異教徒の）黒い血」へと変わった点がもっとも目につく変化ということになるのだが，この変更は，攻撃するリナルド本人の気性から，

9　イタリアの伝統的な詩形である 11 音節詩行の場合，アクセントの置かれるパターンは，①6 番目と 11 番目の音節，②4 番目と 8 番目と 11 番目の音節，③4 番目と 7 番目と 11 番目の音節，の 3 タイプが主流である。これ以外にも強勢が置かれるパターンはあるが，本論では，アクセントの対象となりうる語句の位置から，2 つの詩行にそれぞれ①及び②の型でアクセントがおかれていると判断した。なお 11 音節詩行のアクセントのパターンについては，［Bausi / Martelli 1993：34-37］参照。

攻撃される異教徒の体への，叙述対象の推移を示していると言える。

また 4 行目のもとの表現 da nativo odio stimulato e d'ira「生来の憎しみと怒りに駆り立てられて」と新たな詩行 vorria far sazio, e l'odio il move e l'ira「（長い飢えを）満たすべく，憎しみと怒りが彼を動かす」を比べてみると，削除された語句のうち重要性の低い前置詞の da と d'，追加された語句のうち重要性の低い定冠詞の l'と目的語代名詞の il を除外すれば，nativo と stimulato に代わって，vorria far sazio と move という 2 つの述語表現が加わった点が目につく変化となる。このうち削除された stimulato「駆り立てられて」と，これに応じて新たに加えられた move「（彼を）動かす」を比べてみると，前者が過去分詞（受動態），後者が動詞の現在形（能動態）という違いはあるが，「（憎しみと怒りに）駆り立てられて」「（怒りと憎しみが彼を）動かす」という意味において，両者の間に大差はない。

他方，nativo という形容詞が削除され，vorria far sazio が新たに加わっている点には注意する必要がある。vorria far sazio の 3 つの単語は，それぞれ「欲する」「する」「満腹の」という意味であり，各単語そのものに目を引くような際立った意味があるわけではない。特に，「補助動詞＋不定詞」という組み合わせの最初の 2 単語 vorria far は，sazio があってはじめて意味を成す，それ自体では内容のはっきりしない表現である。また sazio にしても，「（飢えを）満たす」という意味はあるが，これは前行の d'atro sangue ancor lungo digiuno「黒い血を飲めずにずっと抱えてきた飢え」を目的語としているために，sazio 単独では特別な意味をもたない。全体として，vorria far sazio という新たな語句もまた，それ自体で狼の残忍な特徴を際立たせているとは言い難い。

これに対して，もとの詩行で狼にあてられていた nativo「生まれつきの」「生来の」という形容詞は，これが修飾する名詞 odio「憎しみ」との関係において重要である。『エルサレム解放』の詩行では，狼は「生来の憎しみ」に突き動かされて家畜を襲うが，『エルサレム征服』では，この単語を削除することによって狼に付与された性質（したがって狼に喩えられたリナルドの資質）が緩和されていると言える。

以上の考察から分かるように，タッソは『エルサレム解放』でリナルドを狼に喩えるに当たって，ウェルギリウスの表現から「羊」に関連する語彙を削除することで比喩のイメージを和らげる一方，後年の『エルサレム征服』ではさらに若干の言葉を修正することによって邪悪な狼のイメージを緩和している。しかし，依然として疑問は残る。タッソは，そうまでして何故狼の比喩を使おうとしたのだろうか。『アエネーイス』という先例の存在並びに作品内の状況の一致だけで，狼の比喩の使用が説明できるのだろうか。この点を明らかにするために，『エルサレム解放』におけるリナルドの位置づけを，次に確認してみよう。

3. リナルドの役割

『エルサレム解放』には，十字軍のなかで重要な役割を果たす人物が 3 人登場する。総指揮官のゴッフレード，騎士タンクレーディ，それにリナルドである。このうちゴッフレードは，目的の遂行に向けて作戦を練り，全軍を指揮し，時に聖地解放の任務から逸脱す

る部下の騎士たちを叱咤激励して責務に連れ戻す，戦士としての強さよりも指揮官としての思慮分別が際立った人物である。タンクレーディは，リナルドに匹敵する武勇の持ち主だが，戦闘よりも恋の挿話において重要な役割を果たす，どちらかと言えば優雅で叙情的な趣の騎士である。これに対してリナルドこそは，まだ髭が生え出したばかりの少年でありながら，「武具に身をつつんで雷撃を落とす様は軍神マルスと思われる」［*GL*: I, 58, vv. 7-8］，十字軍最強の戦士に他ならない。実際，タッソは，ゴッフレードとリナルドを，相互に役割を補完しあう十字軍の両輪と見なしており，例えば書簡の一節に「一方は指揮官として，他方は遂行者として不可欠なのです」［*LP*: 294］と述べている[10]。また作品の寓意を検証した『エルサレム解放のアレゴリー』[11]では，ゴッフレードを「理性」，リナルドを「憤怒」と定式化して，両者の関係を次のように述べている。

> しかし，憤怒が理性にしたがわず，自らの衝動に引きずられる場合には，往々にして欲望に抗して戦うのではなく，欲望のために戦うということになる。あるいは，出来の悪い番犬のように，泥棒ではなく，家畜に噛みつくことになる。この激烈で不屈な力は，ただ一人の騎士によって表現し尽くされるものではないが，主としてリナルドによって表わされている。［*Allegoria*: 2］

> 十字軍陣営へのリナルドの帰還並びに彼とゴッフレードとの和解は，憤怒の力の，理性の力に対する従属を意味するものに他ならない。(中略)もう一点考慮すべきことは，理性の側は，憤怒を行動から排除するべきでないのと同時に（この点でストアは大きな過ちを犯したが),憤怒に委ねられている役目を横取りするべきでもないということである。この横取りは自然の掟に反することだろう。むしろ理性は，憤怒を自らの伴侶としつつ，自らに従わせるべきである。だからゴッフレードが自ら魔法の森への冒険を行なうべきではないし，リナルドにこそ相応しいその他の任務を自らに課すべきでもない[12]。［*Allegoria*: 2］

この引用から分かるように，タッソの考えでは「憤怒」と「理性」はそれぞれ自立的な要素であり，前者は後者に従わねばならないが，後者は前者の領分を奪うべきではない。つまりリナルドとゴッフレードは，主従関係にあるものの，冷静に全体を統括すべき指揮官が，猛り狂った戦士の役割を果たすべきではないということになる。また，「この激烈で

10　リナルドとゴッフレードの相互補完的な役割については，シルヴィオ・アントニアーノ宛の書簡（1576 年 3 月 30 日付）にも言及がある［*LP*：360］。

11　テキストは Torquato Tasso, *Allegoria della Gerusalemme liberata*, in *Le prose diverse*, a cura di C.Guasti, I, Le Monnier, Firenze, 1875. 本稿では上記テキストを収録した CD-Rom 版タッソ全集 *Tutte le opere*, LEXIS Progetti Editoriari, Roma, 1997 を使用した。以下，引用に際しては，作品タイトルを *Allegoria* と略記し，該当する段落番号を付す。

12　引用冒頭の「リナルドの帰還」は，ゴッフレードと対立して陣営を飛び出した若者が，魔女との逸楽の生活を離れて聖地解放の任務に戻って来たことを指している。また，末尾の「魔法の森への冒険」とは，魔術師によって魔法をかけられ，攻城機を作るのに必要な木材を切り出すことが出来なくなった森にリナルドが単身赴いて魔術を打ち破る場面を指している。

不屈な力は，ただ一人の騎士によって表現し尽くされるものではないが，主としてリナルドによって表わされている」という言葉から明らかなように，リナルドこそが，戦場で「憤怒」の力を遺憾なく発揮することを要請された，戦闘行為の中心人物に他ならない。

作品内部でのリナルドのこのような役割は，彼を形容する比喩からもうかがうことができる。『エルサレム解放』には動物の比喩が多数使われているが[13]，武将を喩える獣は，異教徒であれキリスト教徒であれ，意外に少ない。狼以外の主な使用例は獅子，蛇，鷲の 3 種類である[14]。このうち，蛇については，リナルドの戦いぶりを叙述した次のような一節を確認できる。

> 蛇は 3 本の舌を震わせているように見える，動きの早さがそのように信じ込ませているのだが，あたかもそのように，仰天した人々はリナルドが 3 本の剣を振るっているものと思い込んでいた。［*GL*: XX, 55, vv. 3-6］

戦士の戦いぶりを表現するのに蛇が使われる事例は，このリナルドのケースだけである。もともと蛇は邪悪なイメージを帯びやすく，この作品でも異教の王の残忍さを喩える場面で使われている。同時に，蛇はその脱皮の生態からしばしば「再生」「若返り」の象徴にもなる。この脱皮した蛇のイメージは，十字軍の老将ライモンドに対して，また過ちを悔い改めるリナルドに対しても使用されている[15]。しかし，騎士の強さの表現として蛇が使われるのは，唯一，上記のリナルドの事例だけである。

一方，獅子と鷲がリナルドを形容する事例は，『エルサレム解放』には存在しない[16]。しかし，彼の性格をそのまま引き継いだ『エルサレム征服』に目を向けると（名前はリナルドからリッカルドに改められている），獅子については，他の獣も交えた次のような表現を確認できる。

13　ヴィターレによれば［Vitale 2007: 136-137］，『エルサレム解放』でもっとも多いのが自然現象の比喩，次いで動物の比喩となる。生活にまつわる比喩や，神話に関連する比喩は，前記の二つに比べるとはるかに少ない。

14　『エルサレム解放』におけるその他の獣の使用例としては，豹の比喩が，重要性の低い十字軍騎士に対して，その素早い動きを表すために 1 回使われている（VI, 30, vv. 1-2）。また，虎の比喩も，豹の比喩と同一の箇所に同じ目的で，1 回使われているだけである。ただし，この獣は，異教の女戦士クロリンダの武具の紋章として，たびたび彼女の姿を彩ることになる。虎と女性のこの結びつきは，虎というイタリア語が女性名詞であることに由来すると推測される。

15　蛇の比喩が異教の王アラディーノに使われるのは I, 85, vv. 5-8，十字軍の老将ライモンドと改心したリナルドに対して使用されるのは，それぞれ VII, 71, vv. 3-6 及び XVIII, 16, vv. 1-8 である。

16　参考までに確認しておくと，武将を描き出した獅子の比喩は，『エルサレム解放』の 7 箇所に確認できる。うち 4 つが異教徒もしくは異教的な存在を，残り 3 つがキリスト教徒を形容したものである（この 3 例はすべて，作品の該当箇所にのみ登場する重要性の低い人物に対する比喩）。これらの比喩はそれぞれニュアンスが異なるが，異教徒に対して使われた 4 例は，中世以来のアレゴリーの伝統にしたがって「傲岸」あるいは「獰猛」を含意している（前者は X, 56, vv. 1-4; XX-43, vv. 5-8。後者は I, 85, vv. 5-8; XX, 114, vv. 3-6）。キリスト教徒に対して使われた 3 例のうち 2 つは（VIII, 83, vv. 1-8; XIII, 28, vv. 5-8），居丈高な獅子がおとなしくなるという，強さよりも弱さを示すパターンとなっている。残る 1 例は「雌獅子」（leonessa）という言葉が使用されている（IX, 29, vv. 1-8）。これは，十字軍の兵士ラティーノが戦場で息子とともに戦う姿を，仔に狩りを教え込む雌獅子に譬えた比喩である。

リッカルドは，重い武具を身に着けても，裸の人間か，走っている軍馬のように軽快に進むだろう。獰猛な敵に激しい攻撃をしかけるその様は，躍動する豹か獅子のように見えることだろう。［*GC*: VI, 74, vv. 5-8］

険しい山や森に住む熊もドラゴンも獅子も，獰猛さや毒を供えているとはいえ，リッカルドほどに恐れられているわけではない。［*GC*: XXIV, 56, vv. 7-8］

最後に，鷲は『エルサレム解放』執筆当時タッソが仕えていたフェラーラのエステ家の紋章である。リナルドは作品内でこのエステ家の始祖に設定されているために，鷲は同家の象徴として彼の姿を彩ることになる（彼の武具に鷲の紋章が使われるなど）。この鷲が，直喩として戦士リナルドを描写するような事例は『エルサレム解放』には見受けられない[17]。しかし『エルサレム征服』に目を向けると，敵に迫るリナルドを，水辺の鳥に襲いかかる鷲に譬えた表現を確認できる。

川の岸部で花と草とに囲まれて，美しい鳥たちがくつろぐ。ある鳥は水に飛び込み，ある鳥は羽を広げ，またあるものは新緑の牧場へと立ちかえる。ところが，獰猛な鷲が上空からまっさかさまに滑降してくるのを目にするや，食べ物も，水辺も，生れながらの習慣も打ち捨てて，小さな鳥たちは飛ぶのも鳴くのも止めてしまう。

あたかもそのように，シリア人もトルコ人も黒人も白人も彼（＝リカルド）の到来に我を失い，その武具の見たこともないような輝きから，逃げ隠れようと試みた。［*GC*: XXII, 34(v. 1)-35(v. 4)］（括弧内訳者）

上記に紹介した蛇，獅子，鷲の比喩は，ゴッフレードにもタンクレーディにも，一度も使われていない。重要でない登場人物に散発的に使用されることはあっても，十字軍の核となる主役たちに使われることはない。唯一リナルドだけが，複数の獣の比喩を通して，その戦士としての強さと獰猛さを強調されているのである。リナルドを描写する際のこのような比喩の傾向は，作品全体における彼の役割，戦闘行為の中核を担って「憤怒」を体現する彼の位置づけと密接に関わりあっている。問題となっている狼の比喩も，このような文脈のなかで捉える必要があるだろう。

この点を念頭におきつつ，狼の比喩が使われた第 19 歌の状況を，いま少し詳しく見てみよう。

4. 宗教的背景

問題の比喩が使われた第 19 歌は，『エルサレム解放』全 20 歌の終盤に位置している。第

17 『エルサレム解放』の鷲の比喩については，魔女アルミーダが十字軍の兵士に囲まれて怯える姿を，鷲に襲われる白鳥に譬えた表現がある［*GL*: XX, 68, vv. 5-8］。ただし，この比喩はおびえる女性を白鳥に譬えて記述するのが主な目的であり，襲いかかる鷲はあくまで副次的な存在にすぎず，対応する行為者も明示されていない。

18 歌の末尾でついに十字軍がエルサレムの城壁内に侵入したのをうけ，第 19 歌の 29 連からは，籠城していた異教徒が大混乱に陥る場面が展開する。

（……）陥落した街の悲惨な様子を誰が十分に紙面に描き出せるというのだろう，誰がその痛ましくも悲惨な光景を十分に語りつくせるというのだろう？

あらゆるものが，すでに破壊しつくされていた。人の体が累々たる山と積みあがり，むこうには死体の上に負傷者が，こちらには埋められない死体に埋もれて瀕死の体が横たわっていた。哀れな母親たちは髪を振り乱し，子を胸に抱きしめて逃げ，掠奪者は，戦利品と略奪品をいっぱいにかかえ，少女らの髪をわし掴みにした[18]。

しかし，敵の血を浴びて全身まっ黒に濡れたリナルドは，大きな神殿のある，西方の一番高い丘へと上る道を走りぬけ，不敬な民を駆逐する。その寛大な騎士は，兜をかぶった頭上にのみ恐ろしい剣を振り上げて殺戮する。どんな兜もどんな盾もはかない守りに過ぎない。ここでは武具を着けないでいることが唯一の防御となる。

彼はその気高い剣を剣に対してのみ振るい，武具を身につけない者に対して残酷に振舞うことを蔑視する。武器を手にする勇気のない者，鎧をまとっていない者は，にらみを利かせて大音声で追い払う。ある時は無視し，ある時は威嚇し，またある時は攻撃する，こうしてその力量のなす驚くべき行為が目の当たりになる。武具を身につけている者といない者は，それぞれ異なる危険にさらされながら，等しく壊走させられる。［*GL*: XIX, 29(v. 5)-32(v. 8)］

上記の引用から，リナルドが無防備な者には剣を向けないこと，その戦い振りには一定の制約が課せられていることが読み取れる。この前置きの記述も，狼の比喩のイメージを緩和する働きを担っている。リナルドは確かに貪欲な狼のように異教徒の血を求めるが，それはあくまで武装した兵士に対してなのである。

その一方で，十字軍に侵入された街は，表現のしようがないほどに（「誰が十分に紙面に描き出せるというのだろう，誰がその痛ましくも悲惨な光景を十分に語りつくせるというのだろう」）惨憺たる有様であることがうかがえる。このような凄惨な戦いの情景は英雄叙事詩のひとつのトポスであり，例えば，陥落した城壁内の痛ましい光景については，『アエネーイス』に先例がある[19]。ただし，『エルサレム解放』では，この凄惨な場面が宗教的意義に裏打ちされていることに留意しなくてはならない。狼の比喩の直後におかれた次の詩行を見てみよう。

悲惨な殺戮が，かつて神が住まわれたその崇高な建物を，黒い血と屍で満たす。不敬

18　この哀れを誘う母子と少女の姿に関しては，十字軍が行った残虐行為の史実に基づいているという指摘が一般的である。一方で，「タッソは彼らの一人一人が，ひいてはその民の全体が，人間的な境遇のうちに描き出されるよう敢えて試みつつ，異教徒たちに人間性を与えた」［Ardissino 1996：31］とする意見もある。

19　トロイアの街がギリシャ軍に蹂躙される場面である（『アエネーイス』，第 2 歌，250-558 行）。

な民の上に，遅ければ遅いほど重く落ちる神の正義よ！　あなたの秘められた神慮によって，慈悲深い心は怒りに目覚め，残虐になる。不敬な異教徒は，かつて冒涜したその神殿を，自らの血で洗い清めた。［*GL*: XIX, 38, vv. 1-8］

問題となっている建物はソロモンの神殿であり，これは聖地の象徴的存在である。上記の引用からは，この神殿を汚した異教徒に対して，敬虔な十字軍が，まさに敬虔であるがゆえに苛烈な報復を行なうというロジックが読み取れる。これまでの歴史を清算すべく，敵を上回る激しさで血まみれの戦いを完遂することが，宗教的な観点から要請されているのである。

このような信仰と戦いの密接な関係は,『エルサレム解放』の天使の姿からもうかがうことができる。この作品には，十字軍とイスラム勢の現実レベルでの戦いの背後に，神と悪魔の闘争という宗教的なモチーフが描き込まれている。十字軍には神が，イスラムの軍勢には悪魔が，それぞれ後ろ盾としてついており，両者はことあるごとに戦いに介入する。特に前者は，キリスト教徒の危機に際して一再ならず手を貸している。次の引用は，大天使ミカエルが戦場のゴッフレードを激励する場面である。

「かつてキリストの騎士だった者たちの，今や天上に住まう身となった魂が，あなたと共に闘い，この気高い偉業の壮麗な結末のためにあなたの傍に従う姿を見るがいい。巨大な城壁が瓦解して土煙が渦巻いているあの辺りを見るがいい，あの濃い靄のなかではウゴーネが闘っていて，塔の礎石を打ち壊している。

それ，あそこにはドゥドーネがいて，剣と炎で北の大門を攻め立てている。彼は戦っている者らに武器を与え，梯子をかけて支えては，他の兵士らに城壁を登るよう急き立てている。聖職者の衣をまとい司教の王冠を戴いた，丘の上のあの者は，至福の魂，信徒の牧者たるアデマーロだ。いまでも十字を切って兵士らを祝福しているのを見るがいい。

思い切って眼をさらに上へと向けるがいい，そして天の大軍勢が総結集しているところを見るがいい」。彼は眼をあげ，翼をそなえた無数の天使の軍勢が一つに集まっているのを見た。三つの大軍勢に分かれ，そのおのおのがさらに三つに分かれて広がり転回している。その環は外に行くほど広くなる。いちばん内側がもっとも狭い。［*GL*: XVIII, 94(v. 1)-96(v. 8)］

大天使の言葉から，城壁を攻略しようとする十字軍の兵士らに交じって，戦死した騎士たちの魂までもが戦いに加わっていることがうかがえる。さらに，彼らの背後には天使の「軍勢」が控えている。この「軍勢」という表現は，第 96 連の 8 行詩節のなかで言葉をかえながら 4 回も繰り返されている（oste, milizia, squadre, squadra）。戦いのイメージに直結するこれらの名詞が短いスパンのなかで反復されることによって，天使の集団の戦闘性が強調されていると言えるだろう。また，これらの天使たちが用いる武器についても記述が

ある。次の引用は，十字軍の老将ライモンドの守護天使が，天上の武器庫で武具を選ぶ場面である。

> この世のさすらい人として生まれ落ちた最初の日から，はや敬虔なライモンドを守るべく神慮によって選ばれた守護天使は，いまや天上の王から守護の責務を果たすよう改めて告げられて，神の軍勢のあらゆる武器が保管されている，天の城塞へと昇っていく。
>
> こちらには悪魔の蛇を打ちのめしたあの槍や，巨大な雷撃の矢，恐ろしいペストやその他の疫病を密かにもたらす矢が置かれている。あちらには，大地の基底を揺り動かして街々を瓦解させる，哀れな人間たちの恐怖の的，あの巨大な三つ又の鉾が掛けられている。
>
> 他の武具のなかにあって，輝くダイヤの盾がひときわ光彩を放つのが見えた。ジブラルタルからカフカスまでのすべての国と民を覆い隠せる大きさで，正義の君主と敬虔な街はこれによって常に守られる。この盾を取ると，天使は人の目に見られることなくライモンドのそばに行く。［*GL*: VII, 80(v. 1)-82(v. 8)］

この武器庫の記述からも，天使が帯びる戦士としての一面，信仰に付随する戦いの要素が読みとれる。キリスト教信仰がしばしば帯びるこの種の力のイメージは，十字軍という主題において特に大きな意味をもっていた。この点に関して，第一回十字軍当時，異教徒に対する戦いの必要性を熱心に説いた聖ベルナールの言葉を確認しておこう。

> ああ，真に聖にして，神を信頼している兵士よ。キリストの騎士は安心して人を殺し，より穏やかに自分も死を受け入れる。死んだとしても，それは自分のためであり，人を殺すのは，キリストのためである。彼は，悪人を罰するための，神の奉仕者であり，彼が人を殺すときは，人殺しではなく，悪人を殺すもの，すなわち悪を行うものに対するキリストの懲罰者，キリスト教徒の守護者となる。また，もし殺されたとしても，もちろん滅びることはなく，その目的を果たしたことになる。かれらは神に選ばれたのだ。すべての人において誉めたたえられるべき神，その神がかれらの手を戦いに，指を争いへと導きたもうたのだ！［リシェ 1994：92］

異教徒を殺すことは悪を滅ぼすことであり，悪人を殺すものは神に選ばれたものである。これが，この聖人の説く十字軍の精神である。第一回十字軍の成功を通してヨーロッパに広く伝播したこのような考え方は，16 世紀後半の詩人並びに読者層の貴族・知識人たちにとっても，聖地解放の戦いに特徴的な精神性として知悉されていたはずである。『エルサレム解放』においては，叙事詩のジャンルに付随する戦いの過酷さに，このような宗教的な攻撃性が重なっていることを理解する必要がある。この聖なる戦いのなかで，異教徒制圧のために「憤怒」の化身となるのが，リナルドなのである。血腥い狼のイメージは，この

ようなバックグラウンドを踏まえて初めて十分に理解できるだろう。

最後に，タッソが『エルサレム征服』の最終章でエジプト軍の将軍エミレーノに語らせている興味深い言葉を紹介しておこう。

> 「我々が現にいま目にしているのに匹敵するような，いかなる奇跡がかつて書かれ，語られたことだろう？　仔羊が，狼や蛇や，血をすする獰猛な獅子に身を変えてしまうとは？」［*GC*: XXIV, 123, vv. 5-8］

上記の引用は，エミレーノが，十字軍に壊滅させられた自軍を目の当たりにして慨嘆する言葉である。ここで使われている「仔羊」という単語は，例の agnello という名詞である。おとなしい仔羊（＝キリスト教徒）が，戦いに際しては，狼をはじめとする獰猛な野獣に変身する。この落差が十字軍並びに十字軍を代表する戦士リナルドの特性であり，ここにタッソの狼の比喩の一つの根拠があると言える[20]。

5. 結び

タッソは『エルサレム解放』を執筆する傍ら英雄叙事詩の創作理論を研究し，その成果を複数の著作にまとめている。そのなかには，比喩・隠喩についての意見も散見される。タッソの最初の理論書『詩作論』には次のような一節がある。

> これに加えて，隠喩の言葉は，トランペットの音で雷鳴を喩える場合のように，小さいものによって大きいものを言い換えるのではなく，雷の轟きによってトランペットの音を喩える場合のように，大きいものによって小さいものを言い換えるのでなければなりません。というのも，後者が見事に上昇させるのに対して，前者は同じくらい見事に下落させ，貶めるからです。
>
> このような注意は，喩えや，いわゆる直喩においても守られなければなりません。
>
> ［*DAP*: 44-45］

20　一言付け加えておくと，タッソ（特に 1575 年までのタッソ）は，必ずしも峻厳なキリスト教徒だったわけではない。彼が聖地解放という題材を選んだのは，対抗宗教改革という同時代の影響もあるが，それ以上に，ホメロスやウェルギリウスに匹敵する英雄叙事詩の傑作を書き残したいという創作上の理由が大きい。タッソにとって十字軍の主題は，何よりもまず，英雄叙事詩に相応しい厳粛なテーマを提供してくれる事績に他ならなかった。さらに言えば，『エルサレム解放』で光彩を放っているのは，信仰のテーマそのものよりも，魔術がもたらす不安と魅惑に満ちた幻影や，異教徒とキリスト教徒との恋の挿話，あるいは破滅に瀕した異教の武将たちのパセティックな姿なのである。ただし，これらは，狼の比喩を主題にした拙論が取り上げる問題ではない。

ここでタッソが言及しているのは,喩えるものと喩えられるものとの関係の問題である。A を B に譬える場合，共通項を媒介とした両者の結合によって，B のイメージが A にもたらされることになる。トランペットを雷鳴に喩える表現では，この自然現象がもつ壮大さと破壊のイメージあるいは背後にあるゼウスのイメージなどがトランペットの響きに付与されることになる。逆に，雷鳴をトランペットに擬した比喩では，雄大な自然現象が卑小な楽器のイメージに，神の行為が人間の営みのイメージに矮小化されることになる。

本論が問題にした狼は,貪欲や残忍といった否定的なイメージを強く喚起する獣である。比喩のメカニズムを理解していたタッソが，十字軍の英雄を喩えるのにどうして狼を使用したのか，そこに何らかの意図はなかったのか，キリスト教徒の戦いを相対化するような密かな目的はなかったのか。これが拙論の出発点だったが，これまでの検証から明らかな通り，この比喩に関するかぎり詩人の特殊な意図は確認できない。

問題の比喩のベースになっているのは，ウェルギリウスの先例である。籠城する敵に対して武将が侵入路を求めて必死にその周囲を探るという作品内の状況の類似が，狼の比喩を導入する一因となっていた。特に『アエネーイス』という権威ある先例にこの比喩が使用されていたという事実は，タッソの選択に少なからぬ影響を及ぼしたはずである。次いで，作品内でのリナルドの位置づけも，この比喩の選択に大きく関わっている。十字軍の主要な登場人物のなかで，彼だけが獰猛な獣の比喩を集中的に割り振られていた。もしタンクレーディやゴッフレードが同じ状況にあったとしても狼の比喩が使用されたかは分からない。さらに，十字軍という特殊な宗教的戦いが，狼の残忍さを容認する一因となっている。異教徒に対する苛烈な戦いぶりは，この戦いにおいて，まさにキリストの騎士に求められたものだった。

その一方で，タッソは，リナルドの攻撃対象を武装した兵士に限定することで，この若者の獰猛な戦いぶりを正当化していた。また，ウェルギリウスの比喩に存在していた「羊」に関連する語句を削除することで，この表現に付随する宗教的なニュアンスを緩和していた。さらに『エルサレム解放』から『エルサレム征服』への移行においては，若干の語句を変更することで，狼のネガティブな要素を減らしていた。

これらの処置は，タッソ自身が，狼の比喩に関して一抹の不安を抱いていたことを示唆している。逆にいえば，これらの変更は，このような対処をすれば，狼の比喩を使うことができるというタッソの見込み，この場面で騎士に狼のイメージを付与することはできるし，またこの狼のイメージは比喩として適切だという詩人の判断を示しているといえる。確かにタッソは，図式化した宗教的枠組みを超えてしばしば「敵の人間性」［Ardissino 1996：32］を作品の細部に描き出しているのだが，本論が検証した狼の比喩に関して言えば，十字軍の中心人物を相対化するような意図はなかったものと結論することができる。

現代の読者にいかに狼の比喩が突飛に見えても，16 世紀の詩人にとっては，それは必ずしも不自然な表現ではなかったのである。

使用テキスト（略号）

Torquato Tasso

Allegoria *Allegoria della Gerusalemme liberata*, in *Le prose diverse*, a cura di C. Guasti, vol. I, Le Monnier, Firenze, 1875 (in *Tutte le opere*, Roma, LEXIS Progetti Editoriari, 1997. CD-Rom).

DAP *Discorsi dell'arte poetica* in *Discorsi dell'arte poetica e del poema eroico*, a cura di Luigi Poma, Laterza, Bari, 1964.

GL *Gerusalemme liberata*, a cura di Franco Tomasi, BUR, Milano, 2009.

GC *Gerusalemme conquistata*, a cura di Luigi Bonfigli, Laterza, Bari, 1934.

LP *Lettere poetiche*, a cura di Carla Molinari, Ugo Guanda Editore, Parma, 1995.

参照テキスト

Torquato Tasso

Gerusalemme liberata, a cura di Lanfranco Caretti, Mondadori, Milano, 1979.

Gerusalemme liberata, a cura di Fredi Chiappelli, Rusconi, Milano, 1982.

Gerusalemme liberata, a cura di Bruno Maier, Rizzoli, (quarta edizione), Milano, 1996.

Jerusalem delivered, translated and edited by Ralph Nash, Wayne State University Press, Detroit, 1987.

ウェルギリウス

『アエネーイス』，岡道男・高橋宏幸訳，京都大学学術出版会，2001 年.

Virgilio

Aeneis/Eneide, introduzione di F. Della corte, traduzione di C. Vivaldi, note di M. Rubino con testo a fronte, Garzanti, Milano, 1990.

写本略号（すべて *Gerusalemme liberata* のテキスト）

Es3 Modena, Biblioteca Estense e Universitaria, α. K. 5. 39, sec. XVI.

Fr Ferrara, Biblioteca Comunale Ariostea, II. 474, sec. XVI.

N Napoli, Biblioteca Nazionale «Vittorio Emanuele III», XIII. C. 28, sec. XVI.

参考文献

Ardissino, E., 1996, *L'《aspra tragedia》. Poesia e sacro in Torquato Tasso*, Olschki, Firenze.

Bausi, F / Martelli, M., 1993, *La metrica italiana*, le Lettere, Firenze.

村瀬有司, 2008, 「『エルサレム解放』の印刷本の諸問題」,『イタリア学会誌』58 号, pp. 173-196.

リシェ, ピエール, 1994, 『聖ベルナール小伝』, 稲垣良典・秋山知子訳, 創文社.

Vitale, M., 2007, *L'officina linguistica del Tasso epico*, LED (Edizioni Universitarie di Lettere Economia Diritto), Milano.

(2011. 11. 24 受理)